



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

25

ジュール・ヴァレーズ

パリ・コミュン 谷長 茂訳

中央公論社

世界の文学 25

©1965

ジュール・ヴァレーズ

訳者 谷 長 茂

Illustrations :

Droits réservés A. D. A. G. P., PARIS

昭和40年10月1日初版印刷

昭和40年10月10日初版発行

価 390 円

発行者 宮本信太郎

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 中央精版製本部

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

パリ・コミュニケーション

解説
年譜

3

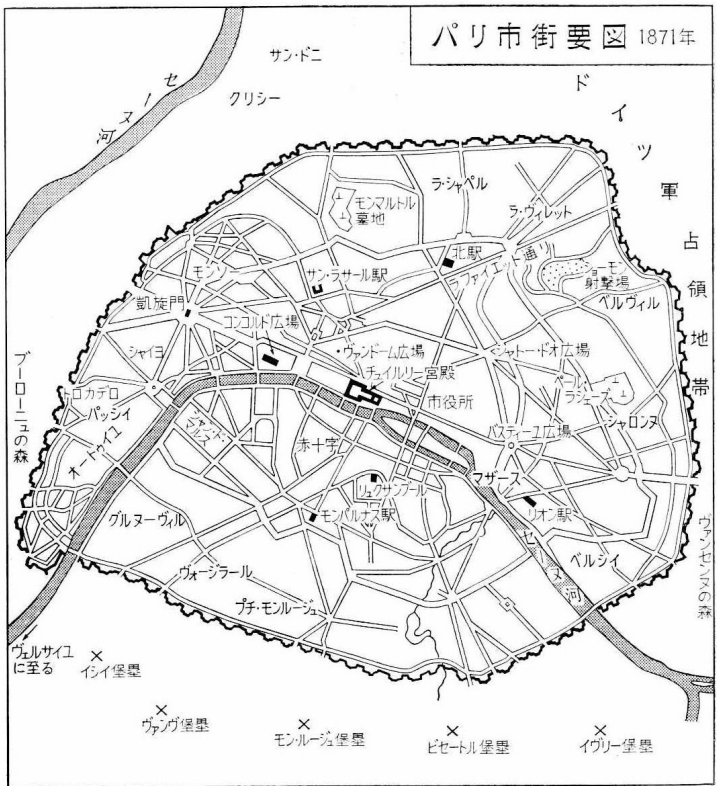
546

559

パリ・コミュニケーション

——ジャック・ヴァントラーズの生涯——

パリ市街要図 1871年



生
い
た
ち

学校では死ぬほど退屈に悩まされ

家庭では涙なしの日とてなく

育ちざかりをずっと

教師たちに虐げられ

親たちになぐりつけられた

みなさん方へ

わたしはこの書を捧げる

ジュール・ヴァレース

ロンドンにて

一母

わたしは自分の母親の手で育てられたのだろうか？

それとも乳を飲ませてくれた百姓女がいるのだろうか？
いっさいわからない。わたしのかじりついた乳房がだれのものであろうと、わたしには効かつたところにかわいがられた覚えがない。甘やかされたこともなく、頬をやさしくたたかれたこともなく、そつと何度も口づけされたこともなかった。鞭でしこたまぶたれただけだった。

子供は甘やかしてはならない、というのが母の持論で、わたしは毎朝、母に鞭打たれた。朝のあいだぶつひまがないときには昼ごろになり、ときたまおやつ時間をすぎてもからのこともあった。

ブランドロー嬢がわたしのぶたれたところに脂を塗ってくれる。

ブランドロー嬢といっても、五十歳のオールドミスである。この人はわたしたちの下の階に住んでいた。初めのころには、彼女はよろこんでいた。というのは、彼女のところには時計がなかったので、わたしのぶたれる音

で時間がわかったからである。《びしゃー！ びしゃー！ びゅーん！ びゅーん！——さて、ちび助がぶたれてるな。そろそろ牛乳入りコーヒーをこしらえる時間かな》

だが、ある日のこと、あまり暑いので着物をまくりあげて、戸口と戸口のあいだで涼んでいるわたしの格好が彼女の目にとまった。お尻が彼女のあわれみを誘ったわけである。

彼女は最初、わたしのお尻をみんなに見せ、隣近所の人たちをけしかけようと思った。だが、こんなことをしても、わたしがぶたれるのを救う手段にならないと考えて、別の方法を考えた。

母がわたしに、「ジャック、そろそろぶたれる時間だよ！」と言う声を彼女は聞きつけると、

「ヴァントラースの奥さん、ご自分でおやりになることはありませんよ、わたしがかわりにやってあげましょう」

「おお！ まあまあ、なんてご親切なことです！」

ブランドロー嬢はわたしを連れだす。だが、ぶつかわりに、彼女は自分の手をたたいてみせ、わたしのほうも大声でわめきたてる。母は夕方になるといつも、自分の代理人にお礼をのべるのだった。

善良な老嬢はわたしにそつとボンボンを渡ししながら、「どういたしまして、お安いごようで」と答えたものだ。

こういうわけで、わたしの最初の記憶はお尻からはじまり、そのつぎは驚きと涙にあふれたものになっている。

薪の燃えている片隅の、古ぼけた暖炉の棚の下で、母は編物をしている。貧しいこの家で女中がわりに働いているわたしの従姉は、虫くいだらけの棚に、赤いときかと青い尻尾の鶏の絵が描かれている青色の陶器皿をならべている。

父は小刀を手にして櫓の木ぎれを削っている。黄色の絹のような削りくずが何本ものテープのように落ちて落ちている。父は生木細工で、わたしのために四輪馬車を作ってくれているのだ。車輪はもうできていた。つまりじやがいもを円形に切ったもので、褐色の皮がちょうど鉄の環の格好となっている……馬車はもうひと息で完成しようとしている。わたしはすっかり感動し、目を大きくみはっていた。そのとき、父はあつと叫び声を立て、血だらけの手を高くあげた。指に小刀を突きさしたのだ。わたしは真っ青になって、父のほうへかけよる。たとえに、ひどくなぐられて、わたしの足がとまる。なぐりつけたのは母だった。唇に泡をため、拳を握りしめている。

「お父さんが怪我をしたのはおまえのせいだよ」

母はドアにわたしのおでこをぶつけ、暗い階段の上に

追いやる。

わたしはわめき、許しを乞い、父の名を呼ぶ。子供らしい恐怖心から、切れてぶらぶらになっている父の手がまざまざと目の前に浮かぶ。もとはといえばわたしのためからだ！ 傷のぐあいがどんなふうか知りたいのに、どうしてわたしをなかに入れてくれないのだろう？ ぶちたければあとでいくらでもぶてばよい。ガラス瓶をゆすつたり、引出しを開ける物音が聞こえる。血止めをしているらしい。

「なんでもないわ」と赤い斑点のついた包帯を折りたたみながら、従姉が告げに来た。

わたしはべそをかき、息をつまらせる。母がまたやって来て、わたしの寝室になっている小部屋に押しこめるにちがいない。毎晩、この小部屋で寝るのがわたしには恐ろしかった。

五歳ともなれば、自分を親殺しのように思いこむものだ。

それにしても、これはわたしの過ちではない！

無理にこの四輪馬車を作ってくれ、と父にねだったとでも？ 自分が血を出すような目に会いたくないために、父に肩がわりさせたとでも？ 父なら少々の怪我でも痛くない、とでも？ そんなつもりは全然なかった。

よし、それなら……そこで、わたしは父と同じくらい



痛い思いをするために、自分の手をひっかけて傷をつけてみる。

母は父をとて愛しているのだ！ 母がむしように腹を立てて怒ったわけはそのためだ。

わたしは大きな字で書かれた本で、両親に従順なれ、と読み方を教わってきた。母はわたしをぶつにふさわしい準備をととのえていたのだ。

わたしたちの住んでいる家は登りづらいすぎたない街にある。この街からはひとめで四方が見わたせたが、乗物は通らない。ここへやって来るのは、突棒で駆りたてられながら牛が引っぱって来る木製の二輪車くらいのものだった。牛は額をさげ、首を突きだし、足をすべらし、舌をたれ、全身から湯気を立てている。そういった牛たちが山の中腹にあるパン屋に薪やパン粉を運んでくる姿を、わたしはいつも立ちどまってながめるのだった。また目を転じて、真っ白になったパン職人たちや、真っ赤に焼けた大きなパン焼かまどをも見物する——大きなシャベルでパンが焼がまに入られると、パンの焼けるにおいとおき火の香がただよってくる！

監獄は街のはずれにあつて、警吏がたびたび、手錠をはめられた囚人たちを連れて行く。囚人たちは目がすわ

っていて、病人のようにやつれ、右も左も見ないで歩いて行く。

おかみさん連中が彼らに小銭をやると、頭を下げて感謝しながら、小銭を両手で握りしめる。

彼らからは悪党らしい様子はまったく見受けられない。ある日、一人の囚人が担架にのせられて、監獄から連れて行かれた。白い布がすっぽりとかぶせられていた。その囚人は盗んだ鋸の下に自分で手首を差しこんだのだった。おびただしい血が流れ、だれもがこの囚人は死ぬにちがいない、と思った。

隣人というところから、看守とわが家は友だちづきあいをしている。看守はときたま、アパートの下階の人たちの家に食事をともにしにやって来る。彼の息子たちとわたしは仲間である。監獄のほうも街よりも楽しいところから、私は看守にときどきそこへ連れて行ってもらう。たくさん樹木におおわれている監獄では、みんなが戯れ、みんながにこにこしている。徒刑場から来たひどく年をとった囚人はコルク栓とくるみの殻で、大伽藍をいくつもつくっている。

ところが、家ではだれも笑ったことがない。母はいつもがみがみと、どなりちらしている——みんなから密猟者と呼ばれているこの偉大な老人は、ヴィヴァレの縁日で警官殺しをやったという話だが、この老人といっしょ

にいるほうが、わたしには家にいるよりずっとおもしろかった！

四人たちは花束をもらうと、胸に抱きしめ、ふところにかくしこむ。わたしは以前、応接室の通りすがりに、おかみさんたちが彼らに花束を与えているのを見たことがあった。

また別の四人たちはオレンジや菓子をかかえている。

彼らがまるでまだ年端もいかない子供でもあるかのよう、母親たちが持つて来てやったのだ。子供なのにわたしは、お菓子もオレンジももらったことがない。

わたしは家で一本の花すら見た覚えがない。母はそんなものは邪魔っけだ、二日もすると腐ったにおいがする、と言う。ある晩、わたしはばらのとげに刺された。母は「いい気味だ！」とわたしに言ったものだ。

わたしは人がお祈りしているとき、いつも笑いたくない！ 我慢しようとしてもだめなのだ。ひざまずくまえに、わたしは神にお祈りして、わたしが笑うのは神さまのことではありません、と心から誓う。それでも、ひざまずくとすぐ自制心がなくなってしまう。わたしの叔父にはいぼがいくつかあり、むずむずしてくるといぼをひっかき、しまいにはかみつく。そこでわたしは吹きだしてしまふ。——幸いにも、母はいつも気がつかないでい

る。だが、神さまは何もお見通しなのだ。神さまはいったいどうお考えなのだろう？

だが、あの日は笑わなかった！ わたしたちはヴァルザックの叔母と、フアレールの叔父たちと、家でいっしょに食事をしていた。ちょうどタートを食べている最中に突然、あたりが暗くなった。それまでずっとむし暑く、息苦しいほどで、みんな着物を脱いでいた。あつというまもなく、雷が轟きわたった。雨が滝のように降り、大粒の水滴が埃のなかへ音を立てて吸いこまれていく。

地下倉のような冷気と、埃っぽいにおいがただよう。街ではどぶがあく汁のように泡を立て、窓が軋みはじめた。雷が降ってきた。叔父や叔母たちは互いに顔を見あわせていたが、なかの一人が立ちあがった。彼は帽子を脱ぎ、お祈りをとなえはじめた。みんな帽子を脱ぎ、老人も若い者も額を悲しみに曇らせて立ちつくしていた。田畑をあまりひどく痛めつけないように、とり入れ時の収穫物を白い霰弾で殺さないように、と彼らは神に祈っていた。雷がひと粒、みんながアーメンと言ったとき、窓からはいつてきて、コップの中へとびこんだ。

わたしたちは田舎の出であった。

父はれっきとした農夫の子で、その農夫は自分の息子が聖職者になるように勉強することを望んでいた。この

息子はラテン語を学ぶために司祭の叔父の家にあずかれ、ついで神学校へ送られた。

父——たしかにわたしの父にちがいない人——はそんなところにとどまらず、大学入学資格者となり、栄職につこうと望んでいた。彼は陰気な街なかの小さな部屋に住み、昼は一時間十スウの学習指導をいくつかやりに出かけ、夜はある百姓娘を口説きに帰って来る。この百姓娘が未来のわたしの母であり、そのころは病気の叔母のそばで、献身的な姪めいとしての義務を果たしていたのである。

こういうことから彼は司祭の叔父と仲たがいし、教会とも訣別けつべつした。二人は愛しあい、《婚約し》、結婚した！そのうえまた、二人は親たちとも仲たがいし、この零落と窮乏の結婚にふみきるために親たちに催告書けいごしよを送りつけたのだった。わたしはこの祝福された縁組の第一子である。わたしは村の南京虫と、神学校の蚤のみの住んでいる古い木造ベッドでうぶ声をあげたのである。

このアパートは五十歳になるある婦人所有のもので、この婦人には二本の歯しかなく、一本は栗色で、もう一本は青色をしている。彼女はいつもにこにこしていて、善良で、だれからも好かれていた。彼女の夫は醸造桶にはいつて酒をつくりながら溺れ死んだ。このことはわたしに

しにさまざまなことを考えさせた。そして、醸造桶への恐怖心を抱く一方で、酒に対する熱愛の情をも覚えたのである。ガルニエ氏——彼女の夫の名前——は死ぬまで酒を飲んだから、とてもしあわせであつたにちがいない。ガルニエ夫人は日曜日ごとに、酒を飲んで愛した夫のことを偲しのんでいる。故人の短靴も、空の二つの半リットル入りコップとならべて、棚の上に置いてある。

わたしの住んでいるアパートでは、みんなよく酔っぱらう。

わたしたちの部屋の上にいる神父は酔眼もうろうとしながら、頬をてらてらに光らし、耳が真っ赤になるまで、けつして食卓から離れようとしなない。口から酒樽さかづきくさい息を吐きちらし、鼻は皮をむいたトマトのようだ。神父の聖務日課書からは魚のシチューのようなにおいがする。神父のところにアンリエット嬢という女中がいて、神父の飲みっぷりをそばでいつもながめている。街ではときおり、彼女と神父のことがひそかに噂うわさにのぼる。

三階にはグレラン氏がいる。この人は消防士長で、聖体祭には広場で指揮をとる。グレラン氏は建築家ということになっているが、人の噂では彼は建築についてはまったく心得がないらしい。《雑木林がいつも水びたしになるのも、もとはといえは彼のせいであり、そのほか彼

は、町に五万フランの負担をかけたことがあり、もしあの女房がいなければ……」ということだった。彼の妻のことが云々されているが、わたしにはなんのことかわからない。彼女は氣立てがよく、瞳は黒くて大きく、齒は真つ白で小さく、唇のまわりにうっすらとうぶ毛が生えている。いつもスカートをふくらませ、歩くと踵かかとの音が高くひびく。

彼女に南部なまりがあるとところから、わたしたちはよく口まねしてはおもしろがったものだ。

彼女には何人もの愛人があると噂されている。それが事実かどうか知らないが、わたしにわかっていることは、彼女がわたしにとってはとてもいい人であるということだ。通りすがりに頬を軽くたたいてくれるし、とても良い匂いがあるので、彼女に抱いてもらうのが好きだった。このアパートに住む人たちは、ちょっと彼女を避けるようにしているが、あからさまに態度に出すまでにははいっていない。

「では、あの女は助手と仲がいい、とおっしゃるのです？」

「ええ、そうですとも、とても！」

「おや！ おや！ それで、あの気の毒なグレランさんは？」

わたしはこういう話をときどき耳にする。母はわたしにはわからないことを二言三言つけくわえる。

「あたしたちのような正直な女は、いずれは飢え死にすることでしょうよ。あんな女たちのためには、亭主の地位や、お祭り用のドレスがむやみと与えられるというのに！」

グレラン夫人は正直でないというのだろうか？ 彼女は何をしているのだろうか？ 何があるのだろうか？ 気の毒なグレラン！

ところが、グレラン氏はみんなと同じように満ち足りた様子をしている。どこの人もみんな、自分の子供たちに愛情と玩具を与えている。ところが、わたしに与えられるものといえば平手打ちだけであり、物語られる話は地獄のことではなく、口ぐせに言われることは泣き虫だということくらいである。

グレランの子だったら、どんなに幸福だったことだろう。だが、ほら！ 母がひとりのときに、助手がわが家にやって来るようなことがあったら……そんなことはわたしにはどうでもよいことだ。

トゥリエ夫人は四階にいる。この人こそ貞淑な女性だ！

トゥリエ夫人は自分の針仕事をかかえてやって来る。母と二人で、下の人や上の人、さらにはラファエルやエスベリの人たちを話題におしゃべりする。トゥリエ夫人は嗅かぎ煙草をかぐし、耳にはいっぱい毛が生えていて、

足にはたこがいくつもできている。彼女はグレラン夫人よりずっと正直者だが、またずっと間抜けで、ずっと醜い。

幼いころの生活について、まだ何か思い出すものはないだろうか？ そうだ。冬になると、よく窓の前に小鳥がやってきて、雪の中のえさをあさったものだ。夏には、むっとする悪臭のたちこめる庭でいつも半ズボン^{ハズボン}を泥まみれにした。地下倉の奥に借家人の一人が七面鳥^{セブンバード}の雛を肥育している。わたしに湿った土だんごをこねさせ、それを七面鳥の口に詰めこんだ奴がいる。七面鳥は窒息する。鳥が息をつまらせ、青くなるのを見るのがそのころの最大のよろこびだった。わたしはどうも青い色が好きらしい！

母は何度もわたしの耳を引っぱって、平手打ちをくわせにやって来る。わたしのしあわせのためにである。こんなふうに、母がわたしの髪をむしり、平手打ちをくわせるたびごとに、彼女は良い母親であり、わたしは恩知らずの子供だ、と思ひしらされるのだった。

そうだ、恩知らず！ それというのも、夜になってときどき、打ちこぶをなでていると、母に感謝する気持がなくなりだすことがあるからだ。わたしのことに心を配り、これからいろいろと世話をしてもらうために、母

の健康を守ってください、と神さまにお願いするのはまったくわたしのお祈りの最後になってからなのだ。

わたしは大きくなり、学校へ行く。

おお！ すばらしい小さな学校！ おお！ すばらしい街！ なんと生きいきとした街！ 市でにぎわう日々よ！

馬がいなないている。脚を紐でつながら、うなりながらよたよた歩いている豚^{ブタ}。ひよこが巢^{ネスト}のなかでわめきたてている。緑色の前掛けに緋色のスカート姿の農婦。青い色をしたチーズ、新鮮なトンム^{Tomme}、果物の籠、ばら色の赤かぶ、緑色のキャベツ！……

学校のすぐそばにはたご屋が一軒あって、そこでよく干し草が荷積みされることがある。

わたしたちはその干し草に目の上までもぐりこみ、まるで毛を逆立てたような格好で、汗まみれになって出て来る。細い茎が首に、背中に、手足にくっつき、ピンで刺されたようにちくちくする！……

わたしたちは稲塚のなかに教科書や、小さなバスケットや、バンドや、木底靴をなくしたものだ……お祭りの日の有頂天ぶり、危険なことへの感動のきわみ……なんとすばらしいときだったことか！

干し草の荷車が通ると、わたしは帽子をぬぎすて、